「フランス・アルプス瞥見記」東京大学合気道部編『赤門合気道』第27号　1985年　pp.64-73

# フランス・アルプス瞥見記

五十年入学　稲賀繁美

Tへ、感謝をこめて

そろそろ後輩に海外流離譚でもつづってくれるほどの人物現われれば、お役御免を願い出ようと思っている小生ながら、韓国まで行って、韓国女性の魂をとらえた現役一人居らぬようでは、しかたない、老いの一徹で今年も外国良いとこ一度はおいで、といった宣伝をつづけさせていただくことにする。付言するにますますもって老いの繰り言めくが、日本男子が相手にできる女性は結

局ポルトガル女性と韓国女性をもって尽きるのではないかというのが、小生の昨今の感想である。日本女性は海外どこへ行っても引く手あまただし、事実理想的に事後の運んでいるカップルを小生も何人となく知っているが、逆は真ならず、日本人が世界の孤児たらぬ為にはせいぜい日本女性の海外雄飛に期待する他ない、というのが、小生のちょっぴりほろにがい感触である。そう、上野千鶴子女史の指摘を俟つまでもなく、今や男性の女性化は必至の時代であって、問題はいかに男児にその夢をかなえさせる、せめてもの幻想だけでもいだかせうる世界の代替物を作りあげるかにある。どうせ遠からず今まで男性の独占してきた多くの領域が、世界の良くも悪しくも安定化してきた世相に応じて、女性たちにとってより適した仕事場であることが明らかとなり、男性たちが欲求不満のはけ口に困り出すのは目に見えているのだから。合気道部に女性主将の誕生するのも近い将来の事だろうと小生は推断する者であるが、その女主将が外人のダンナでもみつけて文字通り海外雄飛してしまったら、残った男子部員たちは、もう、アフリカに命をかけて金でも堀りに行く他ないのではあるまいか。男の住みにくい世の中になってゆくことうけあいなのである。SIDA（とフランスでは言う）が恐しいから、おいそれとホモ道に逃避するわけにも行かないし、小松左京が三十年代のポルノアニメにヒントを得て描いたような、男子の男根への形態学的退行も残念ながら文明の進度には追いつきそうもない。どうセヴイシュヌ神があとの尻ぬぐいをしてくれるからと信じて、ジヴァ神気取りで地球最後の日でも演出する位しか、男児の名に値する偉業はもはや残されていないのではないかと思うと、この夢想自体の想像力の程度の低さに唖然とする他ない。残るは植村さん流の自閉症的、自虐的ないし、自慰的な退行選択であろうか。自己を自己の手で不条理な逆境に追い込んでいき、結果として、自己の意思におそらくは反して、しかしともかく自殺を完遂するという倒錯だけは、まだ男性の特権かもしれない。少なくとも日本のジャーナリズムの騒ぎ方がその原則に共感を寄せる形で発揮させる限りにおいて。

というわけで、本年は生まれて初めて、遭難可能な山に登ってみた。自殺には、失敗した。残念乍ら植村サンとは器も度胸も違いすぎた。

ラ・グレーヴという小さな村がグルノーブルから東に谷峡ぞいにバスで一時間半ほどゆられて行った先にある。日本人には知られていないフランス・アルプスへの登山口で、その行く手にそびえる山を明治山と言う。明治からこの方、果して幾人の日本人がその頂を極めたか。むろん高所恐怖症の小生はそんな野心もない。ケーブルカーの終点の標高三千メートルまで怠惰にも機械力に押されて行ってみるだけで、真夏の新雪におおわれた氷河一面の上をはしゃぎまわれるとあっては、ひたすら軟弱な方に流れてしまった。

とは言えケーブル・カーも捨てたものではない。標高千四百十七米のラ・グレーヴからいっきに三千米まで上昇するうちに視界は予期せぬほどの雄大な拡がりをみせ、ほとんど戦慄を覚える。ツェルマートからマッターホルンへの光景やシャモニからモン・ブランへの展望に比べてもそんなに遜色はない。インターラーケンからグリンデェルヴァルトを経由して登山電車で入るアイガーの氷河の観光化した風情や、ガルミッシュ・パルチンキルヒェンからツークシュピッツエに至るこれまたいささか管理の行きとどきすぎた道ゆきに比べても、日本人に出会わないだけでもそれなりの情緒があるというものだ。ラ・グラーヴの村がすでに森林限界で、そのあとは季節ならばすぐお花畑。落石絶えぬ褐色の岩壁と尖った岩山の頂をかすめるようにして移動する定員四人のちっぽけな吊籠は、峠を越えるや不意に山向うからたたきつける突風にあおられてたよりなく動揺しはじめる。こんなコースはヘリコプターでは危くてとてもたどれないし、また飛行機では上昇速度も視覚の拡大も極度にすぎるため、かえって緊張感も麻痺してしまう。ケーブル・カーの窓をあけても飛びうつれそうで移つれない岩の顔、指で触れればけがをしそうな獰猛なその表皮、そしてその背後はるかに真夏の光をうけてまばゆく青みがかって輝く峰々、いつのまにか眼下一面に拡がった草原は、新雪後でガスもなく澄み切った空気のフィルターの向うであくまでも深い緑の色調をたたえたまま遙かな山すそを新雪のすぐ下まで伸びていく。目をこらせばそこここに深く物思いに沈んだ青い目のような湖が、谷の底深く、または高原のかたすみにひっそりと憩って居る。他に青いものとては、むしろ紺碧と表現する方が適切なほど冥い高天が地平線と接する底辺部でいささか日本人の眼にも見慣れた空色を呈しているばかり。まるでガラス張りの原寸大模型をちっぽけな眼と化して中空に浮いた我が見やっているような、一種非現実的な距離感と無媒介感とにとらわれる。空気があまりに透明に過ぎるのである。「一九八五年八月九日、快晴。」

一気に山頂まで行ってしまうのは何ともったいなく、途中下車してみると、季節はずれとは言え小さな植物がたくましく地上にはいつくばって花を咲かせている高原だった。大気は快いが日光が肩をチリチリと刺す。夏の虫たちがそこここで鳴き、美しいハンミョウが行く道を先導するように飛ぶ。それ以外には風が時折り喨喨と耳に鳴るばかりで、不思議なほどのしずけさである。都会の喧騒がそのまま避暑に来たような日本の夏山のかしましさとは無縁の世界。空を見あげると文字通りそちらに転がったが最後、吸い込まれてしまいそうに不気味な口が、白い氷河の壁の彼方にぽっかりと空いている。

土地の人もめずらしいという好天にせっかくの眺望をのがしては、と終着駅まで急いだ。普段ならば夏山の氷河は灰色にくすんでざらめ状になり、どんよりと曇った膚合いを呈しているものであるが、今日眼前に視覚の果てまで続く氷河口は、冬山の光沢が

あり、あまりに眩く、二・三分はまともに目を向けることもできぬ。八月も下旬となるとガスが発生して、この光を乱反射させるから、写真など撮っても何も写らなくなるものだが、今日はこの銀世界のかなたの峠から、三々五々現われては、ザイルにつながれてゆっくりと踏み跡をたどってくる登山家たちの姿から、彼らの迂回するクレヴァスの切り口まで、優に三キロは離れた光景があたかも眼前での出来事のように輪郭を浮かび上がらせている。その背後にようやく全容を現わしたのが「明治山系」で、その屏風の如き岩壁が新雪原の彼方ににょきにょきと並んでいる姿はいささか現実離れしている。

ここから二千五百六米に位置する山小屋、シャンセル避難地に向った。新雪をけたてて山を駆け降りるといえば聞こえは良いが、実際は、履き慣れぬ山靴に足をとられ、こけつまろびつ、優に二十回はつるりすってんと尻もちをつきつつ、腰ポケットに入れた手帳を文字通りパルプの餅状にし終せたところで、ようやく荒場に着いた。日本の荒場での進路選択にはいささか自信のあった小生も、どうもここでは勝手が違う。降下不能の岩床の上に出てしまったり、危うく足をくじきかねぬ浮石に身を託けてみたり。それでもいつしか草原が点在し始め、ハイマツの群落が目に入り始め、やがて眼下に文字通りの掘っ立て小屋の屋根が見えた。時刻は早や夕刻で急速に気温が落ちはじめていた。

この小屋は定員三十名程で、管理人はまだ若い女性とその娘たち（？）。小屋は石英質の巨大な鉱脈の強固さゆえか浸食に耐え棚状に残った台地の先端に位置し、右手を見おろすと直径百メートル足らずの湖に雪透け水が細い滝となっていくすじか落ちている。背後からは、ついさっき下ってきた山体がのしかかってくる。眼下はるか先にラ・グレーヴの村が小さく見え、夜の声を聞くとともにかぼそい街の光がなんとはなしにランプ生活の小屋住まいの人々の郷愁をそそのかす。十名強の泊客は皆かなりの経験者ばかりで、わずか一週間ほどの休暇全てを費して廻ってきた道程の大きさに驚きを禁じ得なかった若者五人組、小屋のやっかいにはなっているが自炊をつづけ明日にも明治山系の彼方の山小屋をめざそうとする二人組。これまた偶然グルノーブルからのバスで一緒だったババリヤ人とチェコ人のみるからに年期の入ったおじいさんの二人組み。夕食も日本の山小屋の比ではないし、宿泊料も当地のホテルの半額以下。九時前には翌朝四時出発を予定するほとんど全員が床についた。眠むれぬ小生は毛布にくるまり、戸外に出て、銀河の流れる大空の下に寝そべってしばし何も考えずに時を過した。

翌朝十日は例によって天気予報とは異なり、寒風ふきすさび、みぞれ模様。二組は予定を強行して出発。五人組は予定を変更して下山。小生は結局天候をしばらくながめることにした。七時過ぎて山手に霧は残るものの好転。本日はまわりの高原を散歩する程度の休日とする。夕方からは新泊者が多数到着したが、山の作

法の心得なく、傍如無人のかしましい一家庭が居て、就寝時まではおかみさんの罵声に悩まされ、ようやく寝しづまったかと思うと今度はダンナの大いびきと小生の横にいる息子の徘徊癖のお蔭で安眠できず少々げっそりした。ところがこの一家、小生の気付かぬうちに翌朝早々次の場所目ざして消え去っていたあたり、案外歴戦のつわものだったのかも知れぬ、とあとで思い直した。

十一日。晴れ。六時前に山小屋出発。途中で日の出を待ってたたづんでいたら、小屋の若女主人が、すさまじいスピードで降りてきて一言挨拶したかと思うやあっという間に見えなくなった。身の軽さには驚くばかり。当方は途中森林に入って、谷向うの教会を中心に寄り添う村落に見とれたりして、昼前にようやくラ・グレーヴの村に戻る。ここから谷ぞいに一種の遊歩道があって、二十キロほど東南へゆったりと登って行くとアルプ避難所に至る（二千七十九米）。ハイキング・コースと大差ない道程で、途中の白樺林に沿った渓谷など日本では観光業者が放ってはおかぬキャンプ地になるだろう。そんなところで午睡を楽しみ、一面のクロッカス畑を避け様もないままに踏みしいて進むと、ようやく山道にさしかかる。滝の重なる峡谷をつづらおりで三百米ほど昇るわけだが、地図を見て考えていたほどのこともない。見おろすにつれ谷の深さが見事だったが、少々観光客も多すぎて、すり切れた地表があわれに見えた。この坂を簡単に登り切ると、白馬のお畑畠をはるかに深くしたような高原が眼前に拡がり、左右になだらかな岡が盛り上って我々を奥へと誘う。うしろを振り返ると、しかし今しがた通って来た峡谷の眺望はすでに利かなくなっていた。この二日で既に新雪は完全に消え、残雪のみをまとった山塊は、夏本来の表情を取り戻していた。その地表をいくぶん秋めいてちりぢりになりかけの雲の影がゆっくりと舐めては移ろって行く。

今日の避難小屋は幅三百メートルほどの広がりを持つなだらかな谷の奥の小高い台地の上に位置し、三棟の小屋から成る比較的大きなものだ。夕食は三家庭親戚同志が子連れで来ている大集団と一緒で、わいわいやっているうちに何を食べたのかも忘れてしまったが、この子供たちの長男格に十二歳だかのおそろしく聰明な子が居て、大人にもできぬような的を得た質問で、日本の労働条件の話から、就職の件、エレクトロニクスの話、原爆の話、はては日本と中国の歴史に至るまで質問責めにされ、いささか高山病ゆえか頭の回転の落ちていた当方には充分な説明ができなかった。ちゃんと語彙を選んで「他人」に呈ずべき質問を構成してくるので、意表を突かれた感じだ。いささかも背伸びしてたりせず、学校教育の成果の丸る写し的なおりこうさんぶりが見られぬのには、正直感嘆した。普段こういう議論をフランス人とする場合酒が入っているから舌のすべりも良いのかもしれない。しらふで答弁するにはいささか問題がむつかしすぎた、と妙な弁解でもしておこう。

十二日。五時半起床、六時暗黒の中、子供連れも多く、まだ寝静っている山小屋を出発。小屋眼下の西南に大きく湾曲して切れ込んでいく沼沢地に降り、さらに峡谷に添って山奥の小屋を目指す。幅は末端で百メートル程だが両側を三千メートル級の山腹の岩壁にさえぎられているから夏とても一日に何時間と日照のないこの渇れ氷河上の沼沢でむかえた朝はまことに清冽、それもそのはずであたりが明るくなっても一向に気温が上昇しない。まわりにもひとっ子一人なく、ようやく、左右の岩壁から落ちてきた巨岩に埋もれた野生そのままの荒場に出たあたりで沼沢は日本の谷あいの急流を思わせる早瀬に転ずる。轟々たる渓流があたりの深閑として昼なお薄暗い静寂さをますますきわだたせ、いささか心細くなっていた小生の背後に、ふいにするどい口笛が鳴った。はっとして振り返ると、渓流の向うに一人の山男が手を振るかと見るや飛ぶように下流に消えて行く、あとで知ったことだが、当日夜やっかいになることとなる山小屋の主であった。彼は毎日のように二つの山小屋の間を往復しているのである。とても常人にまねできる技ではない。

時刻はまだ八時にもならぬ候であったか。ここいらで谷は二手に分かれる。南に登れば氷河に通じその先にも海抜三千百メートルほどのところに山小屋がある。西に進むと渓流はすぐに礫の堆積しただらだら坂に変じ、その先水平距離四キロほどのところにいまひとつの山小屋がある。両者の間は三千メートル級の山塊で完全に分断され、互いに直接連絡するルートは無い。

とりあえず進路を南にとり、氷河の末端まで行くこととした。最初こそ巨岩を乗り越えるのに苦労したが、しばらく進むと、ようやく射し込んできた日光の下に、思いもかけぬ別天地が広がった。あえて教文的な叙述で汚そうとも思わない。知る人とてそんなに数多くはあるまい静かな沼沢は、ふいに花々に埋った秘境を我々に約束した。なるほど桃源とは山奥に人知れずなくてはならぬものと合点した。目に映る光景は描写し得る。しかし包まれてある風景は舌筆にも絵筆にも尽し難い。本多勝一の『ニューギニア高地人』に出てくる別天地も、松田銑氏の好エッセイ『西洋長屋交友録』オーストラリア版に出てくる沙漠の中の「不思議な谷間」も、さてはローレンス・ヴァン・デル・ポストが探険のつどどこかしらで見つけ出す至福の霊宿る谷もちょうど旅人にはこのように映じたのかも知れぬ、との思いに一瞬とらわれて、そうした特権的な場にはからずも――計画して行きつくものではあり得ないが――参入できた自分が何とも言えずいとおしかったことだけを記しておきたい。

だが、氷河の末端まで行ってみると、その先の山小屋をめざすのは無理と悟った。垂直に約千メートル、とにかく岩壁をよじ登るほかない。ピッケルも何も用意なくては、とりつく手がかりも足がかりもなく切り立った岩場である。地図にはもっともらしく道程らしき破線が記してあるが、もはやそれは道ではなく道しる

べだ。

しかたなく簡単な昼食を最後のなんとか坐れる岩の上でそそくさと済ませると、前述の第二の道を選ぶことにした。こちらは午後には日に干され渇ききった山道で、足元からは濛々と埃が舞い上がり、汗が目に入って滲みるようなことこそ日本と違ってないが、顔はすぐにザラザラしてくる。左右の岩山の壁にはさまれて奇妙な砂地の一種の尾根が出来ていて、その白っちゃけた草木一本生えぬ堆積の上にようやくたどりついたとたん強風にたたき落とされそうになる。この沙州ははるかに左に大きく湾曲して、一キロ先とも十キロ先とも全く距離の判断のつかぬのっぺらぼうの孤を描いた末に黒々とした岩山の前で消えてしまう。地勢がどうなっているのかその場に至らぬことには判断の下しようもない。地図の尺度を肉眼に映ずる光景に重ね合わそうにも、どこがどこに対応するのか全く基準となる目標に欠けるのである。追いついた二人連れのフランス人のマダムはいかにも植民地主義奥方然とした服装の似つかわしい人々で、こんなところまで来てしまったグチを言い合っては、のろのろと惰性の足に任せてふらついている。

件の砂地の切れるあたりで墓にぶつかった。専門のガイドで遭難した人々が居て、その霊を慰むべく建立された石碑であるが、その実そこここに積まれた例の道しるべの石積みのせいぜい親分格といった風情で、これは賽の河原のずいぶんと近くまで来てしまったものだ、と妙な感心の仕方で感心した。文章ご覧になってもおわかりの如く、当方の頭もだいぶん麻痺してきていたようだ。

当方が墓参りに手間取っている間に件のお二人は一時的に先になり、荒場を迅回し、残雪のぼた餅みたいな広場もなんとかやりすごし、その先の急傾斜地に至るや、進路の選択に誤ったか、五十メートルほど先で進退きわまって居た。彼女らのお蔭で轍を踏まずに済んだ次第で、これは直登よりジグザグに限ると思って道なりに登ると、登る端から崩れる雪どけ跡の斜面は意外に征服し易く、これで山小屋に至る平地に出るものと思ったのが、甘かった。地形図には事もなげに等高線沿いに描いてある最後の水平移行が実は岩壁渡りだったのである。ふと気付いて下をのぞけばうっかり足でもすべらせば百メートルは落下、命などあるはずもない。現金にもここに至ってペンキで順路が十メートル毎に明示してある。思うに季節ごとに新たな登攀ルートを定めねばならぬほど落石も多く、雪毎に地表もえぐられて行くのであろう。

ようやくこの難関を越えて岩だらけの小山を進んで行くと眼下に赤白に塗り分けた屋根に緑の壁のみすぼらしいトタン小屋が見えた。今にも押し流されそうな、礫の斜面にはいつくばった定員二十名そこそこのバラック。それもそのはず、今ひとつ奥にあったより大きな小屋は数年前のなだれで土台のコンクリート一部を残して二百メートル下の谷に投げ出されてしまっていた。折れ曲った鉄骨の残骸には、月並みだが大自然を前にした人間の無力を

感じて粛然とする他なかった。実際この小屋の背後には海抜二千八百四十メートルに直径百数十メートルの氷河湖が青灰色の水をたたえ、夏にも氷が全面を蔽っているのだが、その対岸を囲む四千メートルの岩山からは、休みなく巨岩が降り注いでくる。例によって全く距離感もなく、見た目にはサイコロほどの岩がスローモーション写真よろしく転って来るのだが、その落下の地鳴りたるや遠雷の比ではない。腹の底に直接響くような不気味さで、話に聞く南米はパタゴニアの峡谷の落石を連想させた。落岩が流れに突入するや、波高三メートルの津波が生じ、それに飲まれて命を失なう探険者が毎年何人か居るのだそうである。幸いこの氷河湖ではそうした脅威もなく、津波を起こすまでもなく、ほとんどの巨岩は湖に入る以前に停止してしまうのだが、こうなっては人間の尺度などそれこそ蟷螂の斧で、生死の境など大自然の面前では、取るに足らぬ差異にすぎぬと思う他ない。

日本ならば富嶽は例外として槍の天辺に等しい標高である。おいそれと下山するわけにも行かぬ。どうしたことかこの前哨基地に、この夜は六十名近い客があった。むろん予想外のことだが、山小屋の中年のおばさんはそこは慣れたものでいささかも動じるところがない。十人も入れば満杯の食堂に順ぐりに客を迎えては余裕たっぷりさばいて行く。それは良いけれど寒風の中で順を待つ我々こそ良い面の皮、実際これが日の照り返しにやられてすさまじい炎症を起こして暑くてしかたがない。とまれようやく順が回ってきて供された食事はすばらしかった。逆境にあれば粗食も匹敵するもののないことは、ブレヒトのメルヒェンを読むまでもなく自明の経験だろうが、この小屋の大気圧不足をものともせずに用意されたごちそうには正直圧倒された。グラタンとローストビーフ。もう高山に慣れたこともあってブドウ酒も遠慮なく飲みほしたら、炎症を起こした顔に火がついた。だがその夜が fourmaise.（これにはどうも適切な日本語譯が思いつかない、暑さが湿度の高い日本と当地では全くその性質を異にするからである。溶鉱炉の榜に居るという感覚が比較的忠実かもしれない。）となった原因はこの炎症だけでも、文字通りイワシのカンヅメにされたからだけでもない。西洋人の獣じみた肉欲の熱が両サイドからむんむんと伝わって来るのだ。つい先ほど夕食の席で前に座ったイタリア語とフランス語とを両用する淑女と言い、その横に居た、いかにもフランス人くさいちょっと癇の強い顔つきのスポーツマンタイプのひきしまった体の美女と言い、これ幸いと彼氏と体を交わしては切ない息づかいを隠しもせずに一晩中乱れるがままに身を任せる。それでいて翌朝には何事もなかった如くザイルに身を託して、小生など到底従い得ぬ山越えの一向に加わって揚々と姿を消す。ふとチベットの山越えにも似る悠々さで山の女たちを描き切った、ジュリアン・グラックの一節が頭を寄切った。

とても山越えの一向のまねはできぬのと悟って翌朝ははや退却の態である。三日月を天頂にいただき、地平線は業火の如く真紅

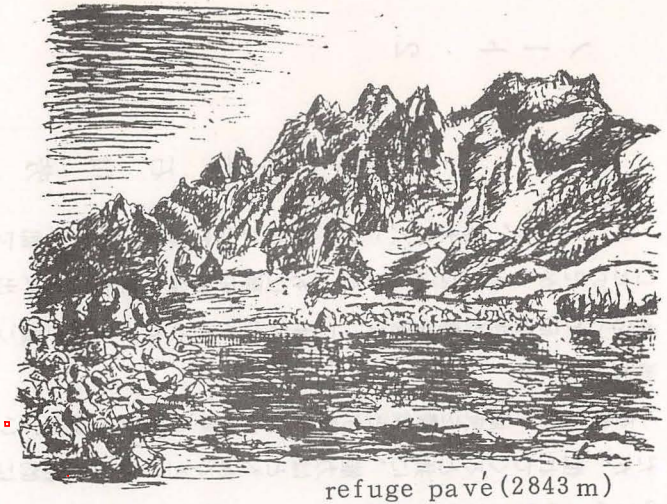
に燃えたつ暗黒の中を、指先も寒さのあまり感覚もないままに昨日たどったばかりの道を下る。日光が刺すや、氷河の岩壁は黄金に燃え立つ。よくもこれだけの長路を登ったものだと我ながらあきれる程の道程を下りつづけてようやく昼すぎに一昨日の山小屋にたどりつく。安堵のあまりビール一ビン空けたのがほとほと効いた。そこから東にだらだらと谷伝いに二十キロ弱歩くだけなのに、息は切れ、睡魔にとらわれるまま、途中で惰眠にふけった。我ながら信じられぬ程足元がおぼつかなくなったのである。

その先高さ二千四百メートルほどの峠を越えれば、あとはひたすら下り坂である。左右の岩山には、あの、あと足でひょこっと立っては愛敬をふりまく小動物も時おり姿を見せる。カランカランと鈴を鳴らす牛や羊の群れもやりすごした。やがて三日月湖の群れなす水郷に至る。雪溶け水が灰色の濁流となって飛沫を散らしていながら、その風情は嘘のように静謐である。そうした小湖をいくつか越えるとようやく森林限界が見えてくる。V字谷にはいつくばるようにして森林が広がり始める。ひさびさに人界に戻った気がした。標高二千三百七十四メートル。ここから一気に千五百十二メートルのル・カッセの町まで下る。ここには空いた宿もない様子なのでさらに二キロの道のりをへめぐって、標高千四百九十五メートルのモネテイエの町に着いたのはもう夕刻であった。俗界とは言えまだまだ深山の中の村落で小ぢんまりした街路や広場に堪能した。山小屋風の共同宿泊施設が格安なのもあってそこを一夜の宿に選び一週間ぶりに浴びたシャワーの快さは山を知らぬ人には理解できないだろう。入浴はいわば俗世間に再度参入するための通過儀礼なのである（ああ月並み）。

今さら下界で味わった幻滅について語るまでもあるまい。山の景色を陳腐だと一蹴するむきも少なくないが、風雪に耐え究極の位相を露わにする山のたたづまいに畏敬を覚えられぬ人々があわれに思われてしかたないという心境に包まれる我が身、我が心であった。ホドラー、セガンチーニでなければヴァルトミュラーの視体験をまがりなりとも追体験できたのが何よりうれしかったのである。いささかだらだらとした山歩きそのままの散文になった。歩きながら考えると気取ったところで串田孫一氏にも矢内原伊作氏にも比し得る名案のあるでもない。山を愛する人々の失笑を買わなければ良いがと案じつつ筆を擱く。

昭和六十年十二月末日

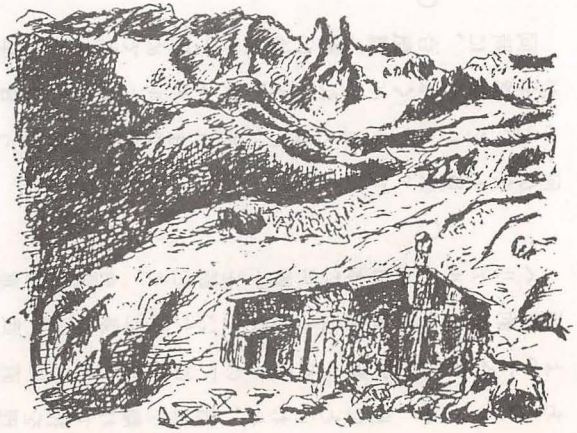
中央奥ふもとにrefuge Alpe (2079m)



refuge pavé (2843 m)

フランス・アルプス
Meije 山系

略　図



refuge chancel (2506 m)